アーカイブプロジェクト活動紹介

2019年度

映像作品・ラジオ番組制作メンバー

遠藤 瑚都音（ことね）

但野 海斗（かいと）

渡邉 大輝（だいき）

担任
深江 恵輔

制作メンバーからの「ここを見て」「ここを聞いて」のポイント

遠藤 瑚都音

私がラジオ番組作りで一番がんばったことは、ナレーション録音です。物音が入ったり言い間違えたりして何度も録り直しをしました。
でも、その度に、「次はがんばるぞ」という気持ちで、一生懸命がんばりました。

但野 海斗

ぼくは、インタビューをする時にすごく緊張しました。終わった後や休み時間には、ほっとしてみんなで笑っていました。ナレーション録りの時は、言い間違いがひどくて、みんなでまたすごく笑いました。

渡邉 大輝

ぼくが映像作品の中で見てほしいところは、インタビューをしているところです。なぜかというと、映像作品作りで一番がんばったからです。特に、質問をするのをがんばりました。他には、相手の話をよく聞くことをがんばりました。

担任　深江 恵輔

ラジオ番組と映像作品作りにおいて、子どもたちは極度の緊張の中、丁寧にインタビュー活動を行ってきました。次第にインタビューの仕方にも慣れてきて、自分たちが知りたいことを積極的に質問することができるようになりました。インタビューに答えてくださった皆様の貴重なお話を聞いていただくとともに、子どもたちの成長の様子も感じていただけたら幸いです。

「何のため、誰のため」のアーカイブ？

富岡第一・第二小学校三春校で平成30年度にスタートした「三春校アーカイブプロジェクト」は、平成25年度から毎年小学5年生を中心に行われてきた「ラジオ番組制作・放送」の活動からの流れを汲んだ発信・記録活動の一環です。
活動最初の年のアーカイブプロジェクトでは、当時の6年生が「震災から三春校誕生の経緯」や「関係者の思い」を映像作品にしました。
この活動は、令和3年度末で閉校となる三春校を、3つの側面からとらえ「記録」と「記憶」に残していくために始まったものです。

アーカイブで残す3つの側面

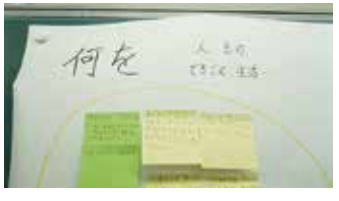
- 震災からの歩み
- 町の学校としての歴史

» できごと、それぞの体験「記録」を残す

- 母校としての思い出

» 卒業生・在校生、教員・関係者の思い「記憶」を残す

今回は令和元年度、小学5年生の総合学習での活動として、年度前半にはラジオ番組制作、後半に映像作品制作実施という2つのメディア制作を体験するという活動内容となりました。この間に、新型コロナウィルスの影響による休校措置があり、映像完成まで半年の時間がかかってしまいました。しかし、子どもたちは制作活動期間中、各メディアの特性や表現方法を学び「どのようにして三春校を後世に伝えるか」を考え続けてきました。
そしてこれからも、ほかの在校生たちとともに考え続けます。「なぜ、誰のために三春校の歴史を伝え、残すのか」。閉校までの残り時間は短いですが、子どもたち１人１人の中に、答えが見つかることを期待しながらの活動です。



活動内容＆スケジュール

この活動のポイント

- 在校生が自分たちの手で後世に残したい「学校の記録」を制作する
- 外部のプロ人材を講師として招き、記録制作のための方法や考え方などを学ぶ
- インタビューを通じて他者の思いを知り、自分の思いと織り交ぜた作品をつくる

活動スケジュール

4月〜11月

ラジオ番組制作

自分の言葉で、自分の思いを伝えるための表現を考えることを重視

令和元年4月〜6月

- 作品テーマ決定
- ラジオメディアの特長を学ぶ
- 取材者選定
- インタビュー練習

7〜9月

- インタビュー収録
- 撮影

10月

- 「とみっぴーラジオ」（富岡町ラジオ番組、ラジオ福島）出演収録体験
- ナレーション録音

11月

- ラジオ番組完成、「とみおかアプリ」で配信

12月〜7月

映像作品制作

インタビュー対象者や自分たちの思いを「映像で」どう表現するかを考えることを重視

12月

- ラジオ番組制作振り返り
- 映像メディアの特長を学ぶ
（音声メディアとのちがい）

令和2年1月

- インタビュー、撮影練習
- 作品テーマ確認

2月

- インタビュー撮影
- 必要映像撮影
- 構成内容検討（構成、編集作業体験）

5月

- 構成内容検討（構成、編集作業体験）

6月

- ナレーション録音
- 制作児童、個別インタビュー撮影

7月

- DVDパッケージデザイン授業

インタビューにお答え頂いた方々からの感想

曙ブレーキ工業株式会社
執行役員　渡邉　高夫さん

去る2月 19 日、富岡第二小学校の5年生（但野海斗君、遠藤瑚都音さん、渡邉大輝君）からのインタビュー要請を受けて、三春を訪問いたしました。
前年の先輩が作成した立派なDVDを拝見して緊張しての訪問でした。
最初は、インタビューをする側もされる側も緊張していたように感じました。
しかしながら、先生方や支援の方々の助け舟や助言が入り、私たちの思いを引き出していただき、いろいろなやり取りができました。
今回の訪問と生徒の方々、先生・支援者の方々とのやり取りを通じ、東日本大震災を受け撤退が決まった旧曙ブレーキ三春製造株式会社を、次代の地域や日本を支える、未来に羽ばたく若い方たちの「学び舎」として借りていただくことができ、この“ご縁”に今更ながら“本当に良かったな”と感慨を新たにいたしました。
皆さんのご案内で、校舎として生まれ変わった自由活動ルームや図書室、科学室、校舎周辺も散策でき、懐かしく昔を思い出しました。更には一緒にご馳走になった学校給食がこんなに美味しいものだと改めて感じました。
新型コロナウィルスという過去に経験したことない新たな試練によって学校での学びができない期間が入りますが、苦労や困難の先には希望の光が必ず待っています。幼稚園から小学校、そして中学校まで、この三春校を母校として学び、巣立っていく皆さんの前途が希望に満ちたものであることを祈り、信じております。
春には少し早い風の冷たい日でしたが、皆さんの真剣な質問と心温まる対応に接し感謝の気持ちでいっぱいです。

曙ブレーキ工業株式会社
広報・IR 室　担当部長　新井　良夫さん

児童・生徒も園児も、そして先生も、皆さんが生き生きとしているなあと思いましたし、学校全体がひとつの家族のように感じました。
普段、自分の生活の中で感じることのない雰囲気が、とても新鮮で、すがすがしい気持ちになりました。短い時間でしたが、訪問して本当に良かったと思っています。
約 8 年半前、開設式の時に植えた小さな木の苗が、今はしっかり根付いて、成長して、花を咲かせている、そんな印象を持ちました。曙ブレーキが少しでもお役に立てたとしたら、社員の一人としてすごくうれしいです。
質問にわかりやすく答えられたのかちょっと心配ですが、倉庫の奥とかお風呂場まで探検したり、私にとって約 50 年振りの給食をごちそうになって、とっても楽しかったです。

皆さんと過ごした時間はいつまでも記憶に残るでしょう。ありがとうございました。

実施学校長より

引き継がれる歴史と想い

平成30年度～令和元年度
富岡町立富岡第二小学校長　渡邉かおり

「私もやりたい」「僕も創りたい」。
それが、前年度の6年生が作成した三春校アーカイブ映像作品「ぼくらの三春校～伝えたい歴史　届けたい想い～」を見た5年生児童のことばでした。
小学校入学時から三春校に通う子どもたち。「この三春校は僕にとっては当たり前の学校だけど、周りから見るとそうではないようです」と語った卒業生。
三春校のどんな歴史を、どのような事実を残しておくことが、この学校から巣立っていく子どもたちにとって必要な記憶となるのか、また全国にいる富岡町の子どもたちにとって大切な記録となるのか。それは、三春校に勤める教職員にとって大きな命題でした。私自身が、当時の富岡町や三春校の記憶をたどることが大きな心の痛みも伴うことを、ここで出会った人たちから学んだからです。しかしそんな私の思いは、三春校の子どもたちや保護者、そしてインタビューにご協力くださった方々が払拭してくれました。どんなに苦しい状況にあっても、子どもたちの将来を大切に思い、今この状況の中で自分たちが協力できること・支援できることを行いたい。その熱い想いが形になったのが、まさに、この「富岡第一・第二小学校三春校」であることを、このアーカイブ映像作品が語っているからです。

今年度は、三春校設立当時の教職員だけでなく、曙ブレーキ株式会社様、卒業生の皆様が子どもたちのインタビューに応えてくださいました。今まで自分にとって当たり前だった教室環境や授業、給食などのすべてが、実は多くの方の想いと努力によって少しずつ創り上げられてきたことに、子どもたちは気付くことができたようです。新型コロナウイルス感染症対策による臨時休業により、3月までに記録の集約やインタビューから気付いた児童の想いをまとめることはできませんでしたが…。

時間の流れとともに、東日本大震災やそれに伴う福島原子力発電所事故について知らない子どもたちが学校に通うようになりました。
2022年の春には、この三春校の校舎を曙ブレーキ株式会社様にお返しすることとなっています。
三春校アーカイブ映像を作成した前年度の卒業生が「自分たちのDVDだけでは、我が母校の足跡を十分には記録しきれていない」と振り返っています。きっとどこまでたどっていっても、三春校すべての足跡を記録することはできないでしょう。
しかし三春校がこの場所になくなったとしても、三春校の歴史と想いを忘れずにいよう・語り継いでいこうという願いは、脈々と引き継がれていくことでしょう。
今年度アーカイブ作品制作に挑戦した3名は、これから完成した三春校の映像作品を手にしながら様々な機会や工夫の中で多くの人々に発信する活動を行います。この三春校の歴史や想いをさらに広げ、つないでいってくれることを楽しみにしています。